

徳川時代渡来の植物図譜

木 村 陽 二 郎

Y. Kimura: The illustrated botanical books imported into Japan during the Tokugawa era

徳川時代、鎖国日本では長崎の出島を経て西欧の植物書が入ってきた。その時代を通じてもっとも有名なのはドドネウスの本であるが、これは植物図譜とは厳密な意味では言えない、しかし記事のかたわらに、ほとんど頁ごとに植物図がある。その点で「本草綱目」とは趣を異にする。「本草綱目」ならば読めるが、オランダ本を読むことは難しい。それでまず誰でも洋書の図に引かれたのである。医学においても同様で、たとえば杉田玄白はいわゆるターヘル・アナトミア、すなわちクルム J. A. Kulm (クルムス Kulmus) の解剖書の図をみて「もとより一字も読む事へならざれども、臓腑、骨節、是まで見聞する所とハ大いに異にして、これ必ず実験して図説したるものと知り、何となく甚だ懸望におもへり」¹⁾としてこの書を求め、ついで骨ヶ原での解剖でたしかめて、西欧の解剖図の正確なことを知った。植物書は図を見れば、すぐその優れていることがわかる。もっとも解剖図といえども、なにも腑分け、すなわち実際の解剖をみなくても、判定はついたはずであった。なぜなら解剖実見の後「扱、其日の解剖の事終り迎もる事に骨骸の形をも見るべしと、刑場に野ざらしになりし骨共を拾ひとりてかずかずミしに、是亦旧説とハ相違にして只和蘭図に差へる所なきに皆人驚嘆せるのミなり」²⁾

図をみてそのすぐれていることを知れば内容をきわめたくないのである。玄白がクルムの本を得て「解体新書」の翻訳を計画したのは前野良沢というオランダ語を知る学者と共に自身の目で実際の解剖をみからであるが、本を得てから解剖実見までの間にも次のようにいっている。「扱毎々平賀源内などに会ひし時に語り合ひしハ、逐々見聞する所、和蘭、実測究理の事共は、驚き入りし事計りなり、若し直ちに彼の図書を和解し見るならば、格別の利益を得る事ハ必せり、されども、これまで其所に志を発する人のなきは口惜き事なり、何とぞ此道を開くの道はあるまじきや、迎も江戸などにては及ばぬ事なり、長崎の通事に託してよみ分けさせ度き事なり、一書にても其業成らば、大ひなる国益とも成るべしと、只其及びかたきを嘆息せしは毎度の事なりき。然れども空しく是を慨嘆するのミにてありぬ」³⁾玄白の話し相手、平賀源内ほど植物書、動物書を手に入れるのに熱中した人は稀である。

彼の蔵書を記した「物産書目」⁴⁾のなかには次の植物書2冊をあげている。

(H 1) 紅毛本草 ドムネウス著

(H 2) 紅毛花譜 スウェルツ著

これは源内の自慢の書物であった。彼の河津善蔵宛の手紙(1767. 11. 19)に

「乍序申上候。右申上候通、古人其物を不見して、人の書置し糟粕をねぶり、さまざまの憶説生申候故、本草綱目と申古道具屋書物出申候故、肝心之薬用ニ相成候薬相知不申候。並ニ唐土ニ不産、外国より渡候物、十ニ三四相見へ申候。是は猶以唐人ともめつそう之憶説ヲなし、甚憂へき事に御座候。仍之、近世私儀、紅毛人へたより蛮国之種類心掛申候。幸なる哉、紅毛之ドドネウスと申、本草手に入、且又極彩色之紅毛花譜、並に介譜、虫譜などハ各日本に一部之書と秘蔵仕置候。形状真にせまり実古今之珍物に御座候。何卒入御覧度奉存候。右之通図画仕候得ハ、文章ハ功能のみにて相済候故、甚弁利に御座候」⁵⁾

杉田玄白は「解体新書」を出すすこし前の安永2年正月、出版したばかりの「解体約図」にそえて、建部清庵あてに返事を出した。オランダの本草書として何があるかという清庵の質問に対しては植物書としては次の三書をあげている。

(S 1) ドムニユース「コロイドブック」

(S 2) アブラハムム・ユンテンク「アムルドゲウワッセン」

(S 3) ウェキンマン

手紙に「是ハ「ドムニユース」と申人著候「コロイドブック」と申大成の書御座候並に「アブラハムム・ユンテンク」と申人著候「アムルドゲウワッセン」其外「ウェキンマン」と申人集候本草に彩色の写真図之書御座候何れも土産積名気味功能は委き説有之……其説の精密成る事本草綱目杯の及候者ニハ無御座候」⁶⁾

1 「好書故事」と「植学独語」

玄白のあげる蘭書は彼の周辺の人の持っていたものであろうが、もちろん当時でも幕府官庫には相当、洋書があった。時代はさがすが近藤重蔵(1771—1829)が文化5年(1808)から11年間、幕府の書庫である紅葉山文庫の書物奉行をつとめたがその際に書いた「好書故事」⁷⁾がある。重蔵は通称で名は守重、号は正斎

または昇天真人という。後に不遇のうちに死んだが、エトロフ島に大日本恵土呂府の標木を建てたことは忘れられない。

「好書故事」の巻第三十蘭書三の本草の項に次の16書をあげている。

(K1) 本草要覧 一冊 原名 コロイドブーク
マッチアス、デ、ローベル撰、千五百八十一年
アントウエルペン

(K2) 独々涅烏私本草集成一冊 原名 コロイド
ブーク レムベルチュースドムネウス撰 千
六百十八年 レイデン。

(K3) 本草粹言 一冊 原名 デ、ネーデルラン
ド、セコロイトブーク ペトリュスネイラン
ト撰 千六百七十年 アムステルダム。

(K4) 本草真源 一冊 原名 ワーレ、ウーフヘ
ニング、デル、フランテン アブラハムスミ
ュンチング撰。

(次に彼があげる動物書の勇斯東私虫獣図譜、虫譜、
介品叢記の3冊を略す)。

(K5) 草木略 一冊 ステバヌス、ブランカール
ツ撰。

(K6) 本草存真図説 八冊 ウエインマン撰。

(K7) ミュンチングコロイトブーク 一冊。

(K8) レメイ、ドロゲレイン 一冊。

(次に虫譜二冊略す)

(K9) 本草必読 一冊 原名オルジネス、ナチュ
ラーリス、ブランタリウム云々 ヨハンネ
ス、ヒイリップ、ルーリング撰。

(K10) 東方草木志 一冊 原名フロラヤポニカ、
ドインベルグ撰 千七百八十四年。

ときに本の説明もあるが、(K5)以下は簡単になって
原名や年号のはっきりしない書き方となっている。こ
れらの書を次のように考える。

(K1) L' Obel, Matthias de: Kruidtboeck oft be-
schryvinghe van allerleye ghewassen, kruideren,
hesteren, ande gheboomten: Antwerpen 1581.

(K2) Dodoens, Rembert: Cruydt-boeck van Rem-
bertvs Dodonaevs, volgens sijne laetste verbeter-
inge: met biivoegsels achter elck capittelt, vvt
verscheyden cruydtbeschrijvers: item in't laete-
ste een beschrijvinge vande Indiaensche gewas-
sen, meest getrocken wt de schriften van Carolvs
Clusivs. Leyden 2 ed. 1618.

(K3) Nylandt, Petrus: De Nederlandtse herbarius
of kruidt-boeck, beschryvende de geslachten
gedaente plaetse tijt oeffeningh, aert, krachten
en medicinael gebruyck van alderhande boomen,
heesteren, boom-gewassen, kruiden en planten

die in de Nederlanden in't wilde gevonden, ende
in de hoven onderhouden worden. Amsterdam
1 ed. 1670.

(K4) Munting, Abraham: Waare oeffening der
planten, waar in de rechte aart, natuiere, en
verborgene eigenschappen der boomen, heestren,
kruiden, ende bloemen...Leeuwarden 1682. Am-
sterdam 1682.

(K5) Blankaart, Steven: De Neder-landschen
herbarius; ofte kruid-boeck der voornaamste
kruiden, tot de medicynne, spysbereidingen en
konstwercken dienstif, handelende van zommige
hier te lande wassende boomen, kruiden, heesters,
mossen, enz. met koopere planten verciert. Am-
sterdam ed. 1 1698. (ed. 2 1714)

(K6) Weinmann, Johan Wilhelm: Taalyrk regi-
ster der plaat-ofte figuur-beshryvingen der bloem-
dragende gewassen. Amsterdam Vol. 1 1736 Vol.
2 1739. Vol. 3 1746. Vol. 4 1748.

(K7) Munting, Abraham: Naauwkeurige besch-
ryving der aardgewassen, waar in de veelerley
aart en bijzondere eigenschappen der boomen,
heesters, kruiden, bloemen..... Utrecht, Leyden
1696.

(K8) Lemery, Nicolas: Woordenboek of algeme-
ene ver handeling der enkele droogeryen, etc.
In't Neederd. genagt door C.V. Putten. Rother-
dam 1743.

(K9) Rüling, Johann Philipp: Commentatio bota-
nica de ordinibus naturalibus plantarum, quam....
d. XVII septemb. a. 1766 offert Johannes Phi-
lippus Rüling. Gottingae 1744.

(K10) Thunberg, Carl Peter: Flora Iaponica
sistens plantas insularvm iaponicarvm secvndvm
systema sexvale emendatvm redactas ad XX
classes, ordines genera et species cvm differentiis
specificis, synonymis pvcis, descriptionibvs con-
cinnis et XXXIX iconibvs adiectis. Lipsiae 1784.
「好書故事」を見て思い出されるのは宇田川榕庵の
「植学独語」である。そのなかの章に「本邦に舶来あ
りて植学に益ある書籍の目録」があり次のようなもの
がある。これは記述が簡単なのでそのまま記す

(U1) ローベル草木誌 一千五百八十一年 一

(U2) 度突乃斯同上 一千六百十八年 一 革律
矢烏斯 印度草木誌

(U3) 仏蘭西 同上 一

(U4) 涅乙蘭土草木略 一 旧新二板千六百七十
三年

(U5) アブラハム・ミューレンベルグ 植物培養之書 一
千六百七十二年

(U6) アールドゲワツセン 同作 一

(U7) 勃郎加盧都 草木誌 一 千六百九十七年

(U8) レメレイドロゲレイン 一

(U9) 肖墨盧 二千七百四十三年

(U10) 同後集 七

(U11) 同統集 九

(U12) 検布爾 日本誌 一 千七百三十三年

(U13) 検布爾 アモニタテス 一

(次に3書をおいて)

(U14) 物印満 八 自千七百三十六年至千七百四十八年

次に9書をおいて

(U15) フロラヤボニカ 一

(この後の7書を略す)

榕庵のは参考となるものをあげているので重蔵が字書その他のところにおいたものもここに入れている。榕庵のあげる書物の順序が(K8)まで(U8)までとほとんど同じである。(K6)としてのウエイマンは(U14)となり(K10)は(U15)である、(U3)の仏蘭西同上はドドネウスのフランス語訳版(1557)とみてよいと思う。ミュンチングの本が重蔵のは(K4)(K7)と離れているので、榕庵はこれを(U5)(U6)と並べたのは改良である。

(K9)のみは榕庵にない。ショメルとケンベルの書はあまりに有名であり、一応ここにあげておいた。ショメルのは家庭百科辞典であり、ケンベルのは地誌あるいは旅行記である。ただし「アモニタテス」いわゆる「廻国奇観」の第5編はまさに植物書であり、また注目すべき植物図集である。

榕庵のあげた参考書が重蔵の「好書故事」と前半、ほとんどかわらないのはおそらく榕庵が「好書故事」の原稿又は写本をみていたからではないだろうか。

文化8年5月に幕府は浅草の天文台厩局内に蕃書和解御用の一局を設け、ショメルの本(U9—U11)を和訳することにした。馬場佐十郎、大槻玄沢が御用掛となったが、長は高橋景保であり、天文台総頭は堀田摂津守正致である。宇田川玄真も文化10年(1813)訳員に任ぜられた。当然当時の書物奉行の近藤重蔵の管理する洋書は玄真の目にふれることができるし、重蔵の蔵書目録も見ることができる、玄真の養子の榕庵はまず馬場にオランダ語を学んだ。それは文化12年のことである。そして文政9年(1826)榕庵もショメールの訳本「厚生新編」の仕事にたずさわるのである。

以上の書以外に植物図の関連洋書は沢山ある。特に幕末近くなればなるほど洋書はふえる、そしてこれを

読める人も多くなった。ここではもっとも大きな影響を与えたドドネウスの書から述べたい。

2 ドドネウスの書の渡来

オランダ医学は外科が主であったが、やがて内科へと向う。そうすれば当然外用のみでなく西欧の薬学、当時の本草学を広く知りたいと考える。語学が不充分なときは、特に図が珍重される。それにはドドネウスの書物は最も適していた。李時珍の「本草綱目」は日本の儒者、学者、医学によって読まれ、日本の本草学に最も大きな影響を及ぼした、李時珍の前年に生れたドドネウスの本草書はおくれて日本に入ってきたが、それなりに一部の人にはあるが日本で珍重された。しかしこの場合は図があるからである。

植物学のルネッサンスはブルンフェス Otto Brunfels (1489—1534)、ボック Jerome Bock (Hieronymus Tragus, 1498—1554)、フックス Leonhart Fuchs (1501—1566) のいわゆるドイツ植物学の父にはじまる。彼らによって植物図は自然の姿、生きた植物の写生によることがはじまり、図は木板により解説と共に印刷されて世にひろまった。特にフックスの図は大きくて立派であった。それらの図はネーデルランドの学者たちドドネウス、クルシウス、ローベルに引きつがれた。

ドドネウス Dodoneus は本来の名はドドエンス Rembert Dodoens (1517—85) である。ベルギーのマリースに生れ、ルーヴアンで学んだ。晩年はライデン大学の医学教授であった。彼の「本草書」Cruydeboek はフランダース語で、1554年⁹⁾にて、版を重ねたが、最初の訳本はクルシウスによるフランス語訳で1557年に出た、英訳本も1578年に出たがオランダ語訳本は彼の死後に出て版を重ねた、その版は
蘭訳初版 Leyden 1608 東大植物園本¹⁰⁾
蘭訳2版 Leyden 1618 (K2)(U2)
蘭訳3版 Antwerpen 1644 国立博物館本 早稲田大学本

一般にドドエンスの本が日本に入ってきたのを商館長ワーヘナールが稲葉美濃守にあげようとした1659年を記録始めとする。しかし商館長フレデリックコイエット Frederick Coijet の日記が私の知る最初の記事である。1653年1月17日(オランダ側の日付)に「筑後殿から我らの中にドドネウスの植物誌をポルトガル語に翻訳することのできる人はいないかと尋ねられ、一人もないので、そのような書物を翻訳することは我らの間で容易にできるのではないと答えた。小田原の領主美濃様の家臣に持参の馬具を、掃部頭には地球儀を渡した¹¹⁾とある。

井上政重(1585—1661)は1627年筑後守に任ぜられ

1632年にはじめての大目付という役となった。キリスト教根絶に力を尽したし、平戸のオランダ商館の倉庫にキリスト紀元年号が刻してあるという理由で、それをとりこわさせ、商館を長崎出島に移させた。ポルトガル人の入港を禁じたが、当時は通詞はポルトガル語にくわしくオランダ語に弱かった。それでオランダ語のドドネウスの本を、ポルトガル語に翻訳してくれといったのである。彼自身病身であったためもあってオランダの医学薬学に興味があった。

モンタス Arnoldus Montanus の記事によるとオランダ商館長のワーヘナール Zacharius Wagenaer が江戸で幕府に暇乞いに登城の際に老中稲葉美濃守正則にドドネウスの本を送る記事がある。当時をしのぶのに興味深かいからそれを引用する¹²⁾

「又尾張、紀の国、エムベラル（将軍：木村註）の叔父水戸の諸王、又閩員美濃様は血色珊瑚珠の一連及びローベ（Loopen）鉄之片を請求せり。ローベの形は紙に書きてワゲナールに与えられたり。美濃様は望遠鏡を請求せり。依りて直に之を送（贈）りしに暗しとして返還せられたり。然るに是れ其家臣が用法を知らざるによりしなり。是と同じくレムベルト、ドドネウス（Rebert Dodonaeus）の植物書を贈りしが、書中の花卉植物の図が写生的にて精巧なるにも拘らず、美濃様は之を返したり。印画が餘りに小さく且よくも描かれあらずとて、大冊にして美麗に描かれたるものを請求せり。又地球儀も余り賞美せられざりき。是はアムステルダムに於て日本エムベロルの為に為し得る限りの技術を尽して作らしめしものなるが、彼等は其価値を知らざりしなり。但し或人は其球面に現れ居る欧州の主たる王国を見出して指点せしもあり。然るに遊星（星座？木村註）を現わしたるものに関しては奇なる考を抱き、多数の人は斯くの如き人及動物が人目に解れずして雲に附着せるものとし、他の者は実際かかる物が天に住すとせり」。

美濃守正則が返したドドネウスの本はどこに納まったかわからない。それから4年たった寛文3年3月1日に商館長のインダイク Hendrick Indijk は將軍家綱に、ヨンストンの「禽獸魚介虫譜」を献じている。これをドドネウスの代りという人がいる。しかしヨンストンのオランダ語訳本が1660年に出版されたので、この見事な絵入りの新刊の動物書が將軍に献じられたのである。

ドドネウスの図は小さいが決して粗末ではない。ローベルの書物（K1）（U1）だと図は一頁一ぱいに画いてあるので図としてはよりよいであろう。ローベルの本は近藤重蔵の説明によれば「按ニ西書予が閩スモノ此編ヲ以テ最古ノ時ノモノトス今時購求シ易カラ

ザル所ナリ」¹³⁾とある。この本の刊行は1581まさに天正9年である、この本が何時わが国に入ったかは不明である。ローベル Mathias de l'Obel (de Lobel 又は Lobelius 1538—1616) はフランスのリールの生れ、英国に死んだ。彼の著作が日本で何ら紹介されているのを見たことがない。その点ドドネウスの本とは異なる。ここに3人組のもう一人、クルシウスについて一言する。クルシウスは(U2)のドドネウス（度突乃斯）の後にしるした草律矢烏斯がそれである。

クルシウス Charles de l'Écluse 又は Jules-Charles de l'Écluse 又は Clusius (1526—1609) は当時はフランドルに属したアラスでうまれた。若いときはモンベリエに学んだことは年下のローベルと同じである。晩年ライデンに植物園をつくった。ドドネウス、クルシウス、ローベルの3人の書物の植物図は同一の出版者のためもあって、互いに流用されている。オルタ Garcia de Orta はインドのゴアで医師をしつつ、植物を研究し図もつくった。それはクルシウスによってドドネウスの本のラテン語版に加えられ、蘭訳版にも収められた。それで(U2)の度突乃斯（ドドネウス）の後に草律矢烏斯（クルシウス）の印度草木誌とかかれているのである。この印度の植物の知識はインドシナ半島やインドネシアから産物が来る日本にとっても貴重なものであった。

3 ドドネウスと野呂元丈

ドドネウスの本はオランダから日本へもってくる本草書としては最適のものと考えらる。日本側も野呂元丈(1693—1761)がこれを和解することとなる。將軍吉宗(1684—1751)は好奇心の強い將軍だった。

享保13年(1728)に將軍の命令で牝牡二頭のゾウが長崎に上陸した。牝は長崎で死に、牡は翌年江戸で、吉宗の上覧に供せられた。このゾウは13年間浜御殿に飼われて後、死んだ。吉宗は馬が好きで、寛保12年オランダの馬術師クリーデマン Godfreed Kriedeman が幕府馬役に馬術を教えたが、さらに3年後オランダ人ケイズル Hans Jurgen Keijser をよんで江戸城内の馬場で吉宗自身彼の乗馬術を見た。馬は蘆毛のハルシャ馬と鹿毛のジャガタラ馬であった。吉宗の気に入られたケイズルは浜御殿内に賄付の宿舎を与えられ、11年間も日本にいた。將軍は狩が好きであったからいろいろな動物に興味をもった。それで寛文3年(1663)に將軍家綱に献上され久しく官庫に寝わっていたヨンストンの「禽獸魚介虫譜」に目をとめたのである。それには美しい馬の絵やさまざまの動物の銅版画が見事であった。その解説を野呂元丈に命じたのである。

それより以前おそらく、吉宗の側衆の加納遠江守久道に推薦された野呂元丈は幕府に採用されていた。吉

宗は薬草栽培に力を入れ、小石川の御薬園を拡大して諸州から薬草を集めた。丹羽正伯、ついで野呂元丈が採用されて諸国に薬草を採集していた。寛保元年(1741)の春、江戸に出たオランダ医官ムスクルス Philip Pieter Musculus らに大通詞吉雄藤三郎を紹介してヨNSTONの本を基に質問し「阿蘭陀禽獣虫魚図和解」1冊をつくり官に収めた。動物81種についての短い解説である。一般に興味をひく動物は一応まとめた。「解トハ画面ノ和解ニテ御座候」とあるように自体に図がないからヨNSTONの原書を見ながらこれをみるということになる。「此書薬物ノ為ニ作タル本草ニアラズ。故ニ功能ノコト一切ナシ、タダ形状バカリヲ著ス、文字多クハラテンノ躰ニシテ解シカタシト云」と記してあり、ついで和解はドドネウスの本に移る。試みにアマンドルボームなど5種を選んで吉雄藤三郎によって、ムスクルスに質問してみると、これは効能、主治が記されているので翌年からはドドネウスによって「阿蘭陀本草和解」のみに打ちこむことになる。玄丈は寛延3年(1750)まで毎年つづけたが、質問の相手の医官やそれを通訳する通詞は年ごとに違うが、ムスクルスが多い。現在寛延2年ののが欠けているがこの年はつくられなかったのであろう。寛延3年(1751)に終っているのは、その年の吉宗の死と関係がある。植物は全部で119種を扱ったことになる。せっかくの和解も幕府の倉に収まり、また元丈もその知識を書きとどめたかもしれないが、関連したなんの出版もないのである。和解に用いられたドドネウスの本は何年版かわからないがおそらく(K2)の1618年版であったろう。

4 ドドネウスの書と平賀源内

ドドネウスの『本草書』を活用したのはむしろ一介の浪人平賀源内であった。彼の『物産書目』のドドネウス著、紅毛本草のところに「一、紙員七百九拾一枚書画、一四紙 白紙 凡七百九拾五紙、明和二乙酉歳春三月得之とあり朱書して「紙ノ大サ大奉書程御座候 此書有徳院様御代五部渡候由 上様に一部田村元雄に一部長崎通詞方に二部此方に一部有之候」と記している。

玄白の和蘭事始(蘭学事始)によるとオランダ商館長カランスが源内の博識に驚き「これによりて、本草綱目を求め、右の龍骨を源内より貰ひ得て返れり。其返礼としてヨNSTONス禽獣譜、ドドネウス生植本草、アンボイス貝譜などいへる物産家に益ある書物共を贈りたり」。¹³⁾この玄白の記事はそのままには受けとれない。カランスの江戸幕府は明和元年、3年、5年、6年である。源内自身の「物産書目」によればヨNSTONの「紅毛禽獣魚介虫譜」は明和5年、ドドネ

ウスの本は先に記したように明和2年、紅毛介譜(アンボイス)は明和3年と記されているから、あるいは龍骨の御礼としてはヨNSTONの書物のみで、他は当時、源内が得た洋書を列記したものであろう。司馬江漢の『春波楼筆記』には「源内は、ヨNSTONと云う蘭書は五六十金の物にて、家財道具まで売払ひ、此書を得たり、この蘭書は世界中の生類を集めたる本にして、獅子、竜其外、日本人見ざるその物を生写しにしたる事かずかぎりなし」¹⁴⁾とあるが江戸の長崎屋で手に入れたのだらう。それはともかくドドネウスの本を明和2年に源内が手に入れたと源内自身記しているのを真実としたい。このとき江戸幕府の商官長はウイレム、ウィッケ Frederik Willem Wicke で大通詞は吉雄耕牛である。それで耕牛の世話により源内はドドネウスの本を手に入れたと思う。先に記した源内のいう日本に五冊あるという話も耕牛にきいた話であろう。彼は自身で手に入れる2年前、彼の代表的著作『物類品隋』(1763)サフランの図に、ドドネウスの図を模写して「泊夫藍此一図以紅毛本草臨」と記したが、これはおそらくの彼の本草学の師の田村藍水の所有本からであろう。彼はドドネウスの図をみておそらく、その立派さに驚いたであろう。それは前述の美濃様とは大違いであって、みる人がみればドドネウスの図のよさがわかるのである。源内が『物類品隋』の図を立派にしようと考え、宋紫石に頼んだのもドドネウスの本が刺激になったと考えることができる。

それでは源内の手に入れたドドネウスの本は蘭訳の何年版だったろうか。源内自身も発行年を記していない。

岩崎克己氏によれば¹⁴⁾「本年(昭和15年)某月某日源内の手沢本を一見する喜びを得た。暫らくその所有を公表する自由を持たないことを遺憾とするが、数年前某展覧会に出陳されたことがあるさうであるから実は案外広く知られているのかも知れない。本書にはタイトルページが脱落しているが、源内がこれを獲た頃から既にさうであつたらしい。書目に刊行の年が見えないのはその故である。」と記し枚数等は源内の記述と一致し序文に In Leyden 1618 Loost van Ravelingen とあるから、1618年版とした。¹⁵⁾

久しくドドネウスの翻訳のことを考えていた源内は田沼意次による紅毛本草の翻訳ということで長崎に行った。彼が後に服部玄宏宛の手紙¹⁶⁾で「四年以前田沼侯御世話ニ而阿蘭陀本草翻訳のため長崎へ罷越候段々珍書共手ニ入且蛮国珍事共承出御国益ニも相成候事共数多御座候」と書いてあるとおり、彼の明和7年(1770)の再度の長崎行はオランダ本草の翻訳が一つの目的だった。彼は「明和7年癸辰(庚寅の誤記)の

頃長崎に赴き大通詞吉雄幸左衛門が家を主とす。阿蘭陀本草を学び、エレキテルセイリテイトといえる奇器を造ることを学び得てかへり、専ら蛮学をなす」（太田南畝）という。

早稲田大学に黒っぽい表紙の「鐸度涅烏斯絵入」（20×27 cm）の写本2冊がある。故岡村千曳氏⁵⁾によれば「この書には序、跋なく、また訳者名も見当たらないので、その成立の由来を知ることが出来ない、また元来何冊からなっていたものか判らない。ところがB巻（第2冊）の15葉目の表に“Arum van Egipten 芋、イモ、主治同前とあり、さらに簡単な説明があって最後に“右永章先生一己之見たり”と注記してある。この永章は吉雄耕牛の諱名であるから、この附言から推して此書は吉雄耕牛の訳編したものと思われる。書名“鐸度涅烏斯”はドドネウスと読むべきであろう⁶⁾と記されている。そして源内が田沼意次から阿蘭陀本草翻訳の命を受けて行ったことが明らかなので源内、耕牛、ドドネウスの三者の関係を考えこれが源内が耕牛にたのんでできたものと推定され、貼りこんである187枚の図は源内の命を受けて画家の文柳の画いたものとされた、源内が郷里の妹婿の平賀権太夫に宛てた手紙では文柳に阿蘭陀本草の図を写して貰っていることが書かれているからである¹⁷⁾、この洞察はなかなか鋭いがさまざまな疑問は湧く。

杉本つとむ氏¹⁸⁾はこの本をくわしく見て、翻訳がすぐれているので吉雄耕牛訳の可能性があると、しかし著者は耕牛のような訳者とは異なり平賀源内ではないかと考える。そのわけは源内の用いるような表現が多いからである。「物類品隣などと比較するとここに、ドドネウスからは離れて独自に編集しようとする意図も推測される」と杉本氏はいう。そして配列の順序は後の編集者が全く反対にして丁づけし目録を作成したこともこの順序やえらんだ種類が野呂元丈の「和蘭本草和解」と大体同じ順序になっている場合が多いので「野呂元丈の和解を一つの拠り所としてその完璧をはかったものとも解することができる」と指摘する。第一次編者が平賀源内、第二次編者としては数人の筆や意見も加えられると考えられ、有力人物として源内とほぼ同時期の高大醇（たいじゆん）を推定する。それは第一冊八六丁表に「高接スルニ」とあるからである。また第2冊53丁表の赤車使者という名称の項に「薩州吉野御薬園＝有之」とあるが、吉野御薬園は安永8年（1779）設立なので源内の死（1779）の後であることを指摘した。

以上は杉本つとむ氏の考察であるが、私も再度この書を見る機会を得たが、次のような推測を述べるしかないのである。平賀源内が生涯第2回目で最後の長崎

行を決行したのは先に『日本自然誌の成立』¹⁹⁾に記したように目的の一つではなかった。行きずまった鉱山の採掘事業に新たな技術の改良はないか、また他に有望な鉱山はないかという問題の他に、日本本草学の研究のためにも西洋の本草学を知りたい。析角彼が所有する植物書2書（H1）と（H2）を理解することである。しかし長崎遊学の旗じるしは彼の手紙に見るように、田沼侯御用のドドネウスの翻訳である、もっとも翻訳といっても膨大な原書を逐次訳するわけではなく、関心のある植物を選んで必要な点を抜き書きすることである。その点で野呂元丈の「和蘭本草和解」にも自然と似てくるわけである。

源内は耕牛自身もドドネウスを持っていることを知っていた。源内は耕牛にドドネウスのなかで特に興味のあるところを部分的に読んで貰い自己の見解を加えた文としてそれを田沼侯に報告したと思う。そして自身の控えを基としてさらに補正し紅毛本草の書をまとめる意志はあったろう。図は文柳に原本から写させたであろう。それは多分早稲田本の図のようなあるいはそのものであったろう。「物類品隣」のサフランの図には輪郭の他に原図に似て斜線を用いている。その画き方が早稲田本の図にそっくりである。彼はこの本を出版のためまとめる機会もなく牢死した。その草稿は他人の手に渡ったり、残された図は切られて、貼りこまれて新しく丁づけされて図録をつけられ製本された。源内がドドネウスと同じ西洋風に頁を右から開くようにしてあるのを和本開きに左から開くようにして丁づけしたため、もとは順席が逆となった。表紙に書いてする鐸度涅烏斯といういい方も源内よりずいぶん後のことと思われる。源内はドドネウスとしか書かなかったろう。

5 ドドネウスの書と遠西草木譜

ドドネウスの本草書の翻訳は第三に天明七年に老中松平定信（1758—1829）によって企てられる⁵⁾²⁰⁾。寛政の改革の年である。蘭学に冷たかった定信がこの翻訳を石井庄助に命じたのは鶴岡藩の医師、前田長庵の熱心な願いによったのである。定信はもとより本草が好きであったし、ドドネウスの植物図のすぐれていることをも認めたのである。石井庄助は元長崎通詞で馬場清吉といった。大槻玄沢が天明6年長崎遊学から江戸へ帰るとき同道して江戸に来てとどまり、その実力を発揮して、江戸の蘭学者を育成し、稲村三伯の「波留麻和解」の辞書をも手伝った。このような実力者を召し抱えて、単にその場その場の外交文書や兵書の翻訳を命ずるのみでは惜しく、長庵は医師のみならず一般の人々を救う西欧の薬の知識を明らかにすることを熱心に定信公にすすめたのである。野呂元丈や平

賀源内のときのようなやり方でなく、この膨大な書物を全文翻訳しようとするのであるからこれは一大事業であって後のショメル「厚生新編」の翻訳に必適するものである。石井庄助は翻訳にとりくんだが仕事半ばで病に倒れ亡くなった。それで大槻玄沢にこれをつづけることを頼んだが、田安侯の侍医で物産のことを好む吉田正恭を玄沢は推薦した、正恭はこれを続け全文を見なおし文政6年(1823)になって出版の見込みがついた。同年大槻玄沢茂質の序があり、栗本瑞見の文政10年の序がある。そして桑名藩教授片山器の天保13年(1842)の序のように「公(定信)逝之後十余年其書始成」こととなった。

「遠西獨度涅烏斯草木譜」と題し、東都吉田正恭修正、桑名石井当光原訳、長崎羽栗費訳、会津荒井行順として体裁もとのい版も彫られていった。しかし残念なことにはおそらく、江戸の大火が版木を焼き、ついに出版を見ずに終わった。もし無事出版されたならば、蘭書翻訳出版物の大冊本の筆頭となったであろう。そしてその影響は単に医学薬学、博物学のみでなくたとえその原書が1618年の古書であったとしても日本文化に大きな影響を与えたであろう。幸にしてその原稿や板木で刷ったものと原稿とを交ぜあわせて再び編成したものが早稲田大学の図書館に残っている。緑色の表紙でとじられた「遠西草木譜」21冊がそれであり、さらに巻の二からある「遠西獨度涅烏斯草木譜定稿初編5冊」がありさらにそれよりもとの獨度涅烏斯草木譜初稿本10冊がある。はじめにあげた21冊本のみ図が入っている。図はドドネウスの図を精密に模し、斜線は入れない、その点は先の「鐸度涅烏斯絵入」とは図の様式が異なる。図もさらにていねいに画かれている。はじめにドドネウスとクルシウスの肖像図を大きく画く、そして桂川国寧(甫賢)がドドネウスとクルシウスのくわしい伝記をのせていることが注目に値する。

6 ドドネウス本草と伊藤圭介

国立国会図書館に「独断匠烏斯本草アベセ類聚」という2冊1秩の写本がある。伊藤篤太郎氏旧蔵のもので氏自身の識語によれば彼の祖父圭介が長崎を辞するとき吉雄耕牛の子の吉雄権之助が耕牛の遺稿を圭介に贈ったものという。耕牛は源内のたのみもあって、ドドネウス所載の植物名に対して日本名をあてていたおぼえ、たぶん和名を書いてドドネウスの本へのはさみ紙としておいたものであろう、圭介は長崎を発つときシーボルトからツェンベリーの「日本植物誌」(K10)(U15)を貰った。圭介は通詞権之助のもとにいたので権之助は圭介の仕事を理解し、耕牛のいはばメモを圭介に贈ったのであろう。従ってこれは圭介の著『泰西本草名疏』にも幾分、役に立ったろうと思われるので

ある。圭介はこれを紙にはり自身は朱筆で自分の学んだラテン語の学名や考察を書いたものをいつつしよにして和紙に貼て製本したのがこの「アベセ類聚」である。たとえば一ヶ所を開くと右側の頁に(Linde boom 1311)と(本草 菩提樹 通名 又桑葉ノ菩提樹トス)と二枚の紙片を貼っている。1311は朱書で圭介がドドネウス本の項目のでている頁数を記したものである。そして見開きの左側の頁に圭介は朱筆で(リンデボームノ菩提樹ノ林氏名ノ羅 Tilia europeaノ蘭 Europische linde boom)という紙を貼りつけているのである。

岡村千曳氏⁵⁾はこれを先の「鐸度涅烏斯絵入」と同じ性質のもので全巻7冊のものの2冊が早稲田本、2冊はこの国会本とされたがこれは杉本つとむ氏²¹⁾の指摘どおり全く別のものであり、岡村氏が国会本を見ないで判断したための誤りであった。

7 スウェールツと平賀源内²²⁾

平賀源内が紅毛本草翻訳のため長崎に行ったのはドドネウスの紅毛本草のみのことではなかった、彼自身によれば「日本一書ニ而御座候」と誇かに記した紅毛花譜(H2)がある。そして幸なことにこの訳書は「阿蘭陀本草」として実物が長崎市立博物館に蔵されているのである。これを源内に頼まれた長崎通詞の本木良永が訳して「阿蘭陀本草」としたその原本名は訳書のはじめに良永の書でみごとに書かれている。原本の標題は次のようである。

(H2) Florilegii pars secunda, in qua agitur de praecipvis plantis et floribus fibrosas radices habentibus: Nec non arboribus speciosis et odoriferis, quibus horti in utrinque germania decorantur opera et impensis Emmanuelis Swertii Septimontani Batavi in gratiam rei herbariae studiosorum edita. Amsterdami Apud Johannem Janssonium, Anno MDCXXXI.

これは訳文に精密に良永によって達筆で書かれている。ただし12語目の fibrosas がぬけている。この題目はすべてラテン語なので良永は次のように記す「イノ印ノ一枚 此書之題号作者ノ文ナリ 羅天韻語 FLORILEGII ト云ヘル言語羅天韻言語彙解書ノ訳文ヲ以テ考レハ和俗ノ言葉ニ訳シテ手折花ト通ス如此ク一言一言ニ彙解書ヲ以テ考ヘ視ニ古代ノ語法ナルカ漸ク二言ノ意味ヲ得ト云ヘト一枚ノ趣意ヲ悟スニ得道シ難シ故ニ題号一枚ノ文ヲ写シ阿蘭陀館出島ニ至ル序ニ阿蘭陀人ニ重訳ヲ請フニ兩輩此語ヲラティン語ト知テ訳スルコト不能ト答フ一人云ク今在館ノ筆者アーベヘル能ク羅天韻語ニ達スト故ニ彼ニ問フ視終テ即席ニ阿蘭陀文ヲ書シテ即チ其文ヲ和解下ニ附ス」トし

て先のラテン語の扉の文の次にアーベールの蘭文訳をのせ、次に彼のオランダ語からの訳文をのせている、すなわち

「樹木菓草花ノ書巻ノ二是ニ所謂草木ノ苗花細根
髭根有ル諸樹木ノ種類并ニ園中ヲ飾ル良香薫草ノ品類
ヲ著ス。ドイツ国、郷名七山ト云ヘル所ノ町ニ住ス
ル、ユマニユエルスウエルテュスト云ヘル者勤業ノ
勞ヲ成シ出シ興ル書ナリ阿蘭陀国府アムステルダム之
書林ヨアンネムヤンスソーニユムトヘル云者開板于歲
一千六百三十一年」

そして「重訳横文字文中ニ手折花ト云ヘル文意無シ
思フニ蘭鋪文意ヲ略セル者ナランカ又巻ノ二ト書ス疑
ハ別ニ上巻題号ノ序文有テ紛失シタル者ナランカ」と
加えている。

吉雄耕牛、西善三郎、本木良永は阿蘭陀通辞の最大級
のトリオと考える。しかし人柄からいって、日本で地
動説をはじめで紹介した本木良永に私はひかれる。人
に忘れられたような「阿蘭陀本草」は彼の学問への情
熱と使命感を今なお脈々と伝えずにはおかない。この
書の中身より、何倍も重要なのは良永の翻訳に対する、
大きくいえば学問に対するその態度である。もちろん
態度ばかりではない。彼自身の語学力に対しては深く敬
服せざるを得ない。

スウエルツの原本は第一部第二部とからなり良永の
指摘のように源内本は第一部の扉頁がなくなっており、
それで第二部の扉頁をはじめに持ってきた本である。
それで図は第一部のもののから初まっている。岩崎氏
によれば「嘗て早川佐七氏が一本を載せられておられ
たが見る機会を失った」⁴⁾とあるので、日本に今もど
こかにあるかもしれない。私は一本をパリ国立自然博
物館中央図書館で見ることができた、それは第一部
(アムステルダム 1620 年版)と、第二部(フランクフル
ト 1614 年版)の合本で有名な動物学者キュビエ
Cuvier の手訳本である。それで第一巻の標題をあげ
ておく。

(H 2) Florilegium amplissimum et selectissimum,
quo non, tantum varia diversorum florum prae-
stantissimorum et nunquam antea exhibitum
genera, sed et raras quamplurimae indicarum
plantarum, et radicum formae, ad vivum plan-
tibus duabus, quantuor etiam linguis offeruntur
et delineantur. Auctore Emanuele Sweertis Sep-
timontio Batavo. Amsterodami apud Joannem
Janssonium Anno 1620.

そして第 2 部は全く前述のものと同じでたゞ発行所
と年が Francforti, Ex officina typographica Erasmi
Kempferii Anno MDCXIV. である。フランス国立

図書館には第一部フランクフルト 1620 版がある。原書
は版を重ねて 1612, 1614, 1619, 1620, 1631, 1641,
1647 と出版されている。

スウエルツはドドネウス、クルシウス、ローバルの
ような第一級の本草学者ではない。この書はいわば園
芸植物図譜である。フオリオ版で銅版画が美しいから
日本に入ってくるのはむしろ自然である。私の見たス
ウエルツの原書は第 1 部が第 7 3 図版までであり球根
類で、第 2 部は 36 図版までであり扉の題目に書いてある
ようにひげ根類と木本を扱う。1 図版に多くの植物を
入れているので種類はずっと多い。

スウエルツ Emanuel Sweerts (1552—1612) は
オランダの Zevenbergen に生れアムステルダムの植
物栽培家であった。

(追記)「好書故事」にあったものはすべて触れるつ
もりだったが紙数を過ぎた。未完としておく。この研
究のために御世話になった中央大学図書館はもとより、
国会図書館、東京大学図書館、早稲田大学図書館、
特に洋学文庫、長崎市立博物館、フランス国立図書
館、パリ国立自然博物館に感謝する。本研究の一部は
文部省科学研究費 No. 138004 による。

引用文献と註

- 1) — 3) 内山孝一『和蘭事始』自然選書 中央公論社
1974 1) 149 頁 2) 153 頁 3) 150 頁
- 4) 平賀源内「物産書目」『平賀源内全集』下巻「源
内先生のことども」1935 26—29 頁
- 5) 岡村千曳「ドドネウス CRVYDT-BOECK の邦
訳について(1)—(3)」『医学のあゆみ』28 巻 6—8 号
1959 源内の河津宛手紙は 7 号の 490 頁参照
- 6) 杉田玄白、建部清庵『和蘭医事問答』東都 1795
上巻 11 丁
- 7) 近藤守重「好書故事」『近藤守重全集』図書刊行
会 1906
- 8) 宇田川榕庵「植学独語」写本国会図書館蔵及び
『植物と文化』No. 10. 1974 印刷所載
- 9) 上野益三「山本亡羊遺愛ドドネウス草木誌」『植
物と文化』No. 12 1974 亡羊の曾孫山本元夫氏初
版本所有を報じたもの
- 10) 木村陽二郎「ドドネウスの『本草書』について」
『植物研究雑誌』50 巻 3 号 1975
- 11) 村上直次郎『長崎オランダ商館の日記』第 3 輯
198 頁 1958
- 12) 和田文吉訳『モンタヌス日本誌一名蘭使紀行』
丙午出版社 425 頁 1925
- 13) 1) — 3) 149 頁
- 14) 岩崎克己「平賀源内の「物産書目」に就いて」

『学鑑』44—9, 6頁 1940

15) 城福勇『平賀源内の研究』創元社 1976 第3版 1644の可能性をいう

16) 平賀源内『全集』下巻 1935 1500頁

17) 同上 上巻 1935 642頁

18) 杉本つとむ, 「R. ドネウスのCRVYDT-BOECKとその翻訳—「鐸度涅烏斯絵入」について」『植物と文化』No. 8 1973

19) 木村陽二郎『日本自然誌の成立』自然選書 中

央公論社 1974

20) 杉本つとむ「日本最初の本格的ヨーロッパ博物学書—「遠西濁度涅烏斯草木譜」とその翻訳」(1) — (2)『植物と文化』No. 15—16 1976

21) 杉本つとむ「独々匿烏斯本草アベセ類聚」の考案」『植物と文化』No. 8 1973

22) 木村陽二郎「E. Sweerts と A. Munting との植物図譜」『蘭学資料研究報告』305号 1976

(中央大学教授)

長野県の天然記念物と私

—その植物について—

本 田 正 次

M. Honda: A botanical essay on the natural monuments in Nagano Prefecture

長野県で国が指定した植物の天然記念物のうち、丸子町の「東内のシダレエノキ」、辰野町の「小野のシダレグリ自生地」、丸子町の「西内のシダレグリ」の3件は埼玉県「田島ヶ原サクラソウ自生地」、千葉県「太東海浜植物群落」、同じく「成東町肉食植物産地」、岐阜県「坂本のハナノキ自生地」とともに大正8年4月9日に、史蹟名勝天然記念物保存法と称する法律が公布されてから全国でイの一番に天然記念物として官報で告示されたものである。時に大正9年7月17日のことで、以上7件はいわば日本における天然記念物の全国元祖として名高く、しかも同時発表の中では長野県が一番数が多いということになる。

丸子町のシダレエノキはどこにでもあるエノキの枝垂性であって、これは全国でも珍しい。天然記念物になっているのは全国ではもちろん長野県だけである。私は上田から鹿教湯温泉に行く途中でバスを下りてこの珍木を見たことがあるが、残念なことに12月の中旬だったので若干の枯葉と、しぼんだ果実が残っていただけで寒々とした姿であった。その後山崎林治氏の話によると、木曾郡山口村にある諏訪神社の境内にも1本あり、また松本市の田町にも若木が1本あるとのことであった。シダレエノキ元祖の長野県のことであるから、この他にもあるのではなからうか。読者諸賢の御教示を仰ぐことができたら幸である。

鹿教湯に泊った翌日は西内のシダレグリを見に行った。シダレエノキの場所と違って山道であり、新雪で道は真白くなっていた。指定当時は10株余りあったというが、私が見た時はその中の最大と思われるものだけが辛うじて残っており、しかも可なり老衰の徴が見

られ、そのうえ雪までかぶっていたので一段と哀れっぽく眺められた。

辰野町にある小野のシダレグリ自生地を見に行ったのはそれから数年後のことで、山崎林治氏のお世話になった。天狗に関する面白い伝説があるそうで、心なしか生えているシダレグリの一本一本がみな天狗が舞い下りそうた不気味な形をしていた。丸子町のものと違ってここではシダレグリの数がとても多く、山の斜面を被うようにして生えていた。

シダレグリは野生のクリから偶然に枝垂性に変化したもので、形態学上の好研究資料として保存されているものであり、長野県のほかには岐阜県の下呂町で天然記念物として残されているものがある。

阿南町の新野には「新野のハナノキ自生地」が指定されているが、私は残念ながらまだこの自生地を見ない。ハナノキは長野、愛知、岐阜の3県に主として分布している日本特産の美しいカエデの種類で、ミズゴケなどの生えている湿原や溪流のほとりなどに見られ、生態的にも他のカエデ類と比べて特殊である。栽培で相当老木になっているものは近県で同じく国の天然記念物になっているものがある。自生北限地は長野県大町市と聞いているが、この場所も私はまだ見る機会がなくて残念に思っている。冒頭に引合いに出した岐阜県坂本のものは木曾川流域であり、新野のものは天竜川中流地帯で、ともにハナノキの産地としては代表的である。新野の方は坂本より2年おくれで指定された。

栽培の場合は自生地の生態条件にかかわりなくよく育ち、各地で庭木として見られるが、私が見た栽培の